様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４５４

研究課題名（和文）ジョン・キーツの詩論と自然観に対するピクチャレスクの影響について

研究課題名（英文）The Influence of Picturesque Aesthetics on John Keats's Poetics and His Views on Nature

研究代表者
江口　誠（Eguchi, Makoto）

佐賀大学・全学教育機構・准教授

研究者番号：５０３３２０６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イギリス・ロマン派詩人ジョン・キーツの詩におけるピクチャレスクの影響を明らかにするものである。多種多様なピクチャレスクの定義を可能な限り整理し、その他のロマン派の詩とピクチャレスクに関する研究を参考にしつつ、最終的にキーツの詩論や自然観に対するピクチャレスクの影響を明らかにすることができたのではないかと考える。主な研究成果は学会発表1件、雑誌論文2件、図書1件の合計4件である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の遂行によって、ジョン・キーツの詩におけるピクチャレスクの影響のみならず、関連した政策や当時の文化的な影響が確認されたと考える。それは従来の批評に見られるように、単にピクチャレスク的描写の有無を詩の中で確認するだけではなく、キーツの詩と大衆文化やエンクロージャー等に代表される当時のイギリス政府の政策など、様々な同時代の文化表象との強い結びつきが明らかとなったと考える。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to reveal the influence of picturesque aesthetics on John Keats's poetry. Organizing a various arguments and definitions of picturesque and also referring to precedent studies on the relationships between Romanticism and picturesque aesthetics, I believe I could achieve the objective of this study. The main results of the said study are as follows: a publication of a multi-authored book, two academic journals and a conference presentation.

研究分野：イギリス文化、イギリス文学

キーワード：ピクチャレスク　ジョン・キーツ　イギリス・ロマン主義　ウィリアム・ギルピン　グランド・ツアー

１．研究開始当初の背景

18 世紀半ばから流行したヨーロッパへのグランド・ツアーに続き、18 世紀後半から 19 世紀前半には、イギリス国内に於いて「ピクチャレスク」（picturesque）という概念に基づいた「ピクチャレスク・ツアー」が大流行した。旅行者たちは、フランスの画家クロード・ロラン（Claude Lorrain, 1600-82）に因んで名付けられた「クロード・グラス」と呼ばれる特殊な凸面鏡を媒介として湖水地方やスコットランドの風景を間接的に眺めることで、目に見える景色そのものではなく、ロランやプッサン（Nicholas Poussin, 1594-1665）らが描いた風景画のように、「景色を絵画化」することを目的としていた。

そもそもピクチャレスクとは、ウィリアム・ギルピン（William Gilpin, 1724-1804）、アーチボールド・アリソン（Archibald Alison, 1757-1839）、ユヴデイル・プライス（Uvedale Price, 1747-1829）そしてリチャード・ペイン・ナイト（Richard Payne Knight, 1750-1824）らが提唱し確立した美的範疇の一種であり、とりわけギルピンが 1782 年に刊行した『ワイ川紀行』が与えた影響は最も大きいと考えられている。彼は「絵画として描かれるかどうか」という点がピクチャレスクの観点として最も重要であると述べている。イタリア語で「画家に関する」という意味を表す“ pittoresco ”をその語源とし、フランス語の“ pittoresque ”を通じてイギリスで発展したピクチャレスクは、エドマンド・バーク（Edmund Burke, 1729-97）の崇高と美の概念をその拠り所としている。彼は崇高と美を明白に峻別しており、ピクチャレスクは両者の間に位置する新たな概念として捉えることができる。Timothy M. Costelloe は、ピクチャレスクが崇高や美と同レベルの美的範疇として認識されるようになったのは 18 世紀の後半になってからであると述べており、当初から確固たる定義を持った概念ではなかったことが窺える。

また、ピクチャレスクは 18 世紀末のイギリス・ロマン主義の誕生と密接に関係している。例えば Christopher Hussey は、芸術がピクチャレスクを経験した凡そ 1730 年から 1830 年という時期は、ロマン主義の前兆となり、芸術が理性から想像力へとその訴えの矛先を移行させた時期でもあったという。そのピクチャレスクがジョン・キーツに与えた影響に関しては、これまで幾つかの研究が行われている。例えばキーツと美の関係を論じた Ian Jack は、自著の中でキーツのスコットランド旅行がピクチャレスク的描写に与えた影響を指摘し、Nancy Moore Goslee は、『失楽園』（Paradise Lost, 1667）で有名なジョン・ミルトン（John Milton, 1608-74）とピクチャレスクの概念がキーツの詩論の礎を築いていたと論じている。Kelly Grovier は特にキーツの 2 つの頌歌とピクチャレスクとの関連から、昨今の歴史主義の問題点を提起している。しかしながら、これらの多くはキーツの一部の作品のみを取り上げ、ピクチャレスク的描写の有無を論じたもの、もしくはキーツの詩に見られるピクチャレスクを断片的に取り上げたものにすぎず、キーツの全ての作品を網羅的に取り扱い、彼の詩論や自然観に対するピクチャレスクの影響について調査した研究は少ない。

２．研究の目的

本研究は、大きく以下の二つの視座によって特徴づけられるのではないかと考えた。第一の視座は、18 世紀から 19 世紀初頭のイギリスにおいて、特にロマン主義の成立に大きな役割を果たしたと思われるピクチャレスクの影響を、ジョン・キーツさらにはウィリアム・ワーズワスらの詩の中に見出すことにある。第二の視座は、これまでその皮相的な関係性のみ重要視されていたピクチャレスクの影響が、実はキーツの詩論の形成及び変化に大きく関わっていることを明らかにすることである。

また上述の通り、本研究は現時点で既に着手している研究の発展的な取り組みである点を強調したい。平成 27 年度末に上梓した著書では、キーツの「秋に寄せて」（“ To Autumn ”）と題された頌歌を取り上げ、その中に描写されている何気ないイギリスの風景に隠されたピクチャレスクの影響、エンクロージャー（土地囲い込み）と呼ばれるイギリス政府による農業政策の影、さらには詩の中に隠された、ある文化的なコードの存在を明らかにした。そこでこれと同様の手法をキーツの他の作品にも適用することで、キーツの詩の新たな読み方が提示出来るのではないかと考えた次第である。

３．研究の方法

平成 28 年度は、18 世紀から 19 世紀にかけて様々な人物が多種多様な表現で定義したピクチャレスクに関する資料を収集するともに、それらの言説を可能な限り整理することに注力した。特に 18 世紀は、1782 年のギルピンによるピクチャレスク論を境に、絵画のみならず建築や庭園についても活発な議論がなされた。しかしながら、ギルピン以前の 17 世紀には既にピクチャレスクの概念が存在していたこともまた事実である。その点も踏まえ、まずはイギリスにおけるピクチャレスクの成立についてまとめた。

従って、当該年度にはまず *William Gilpin: Picturesque Tours, Aesthetics and Life* 及び *A Collection of Books on the English Landscape Garden* の精読を中心に行い、ギルピン及びその他の主要なピクチャレスク論の整理を行った。また当時ピクチャレスク・ツアーの目的地として最も人気のあった湖水地方をはじめ、スコットランド及びウェールズの旅行記集を収集し、余裕があればこれらについても徐々に精読を進めた。

それと同時に、特に関連する 19 世紀初頭イギリスの政治や文化に関する資料収集も行い、当時のイギリス文化や社会に対してピクチャレスクがどのような影響を与えたのか、という点を究明することに努めた。即ち、平成 28 年度は、以降 3 年間の研究活動の土台を作ることに専念し、研究の方向性を定めた。

平成 29 年度以降は、前年度から継続して進めている研究手法、即ち 18 世紀から 19 世紀に出版されたピクチャレスクに関係する文献の収集に引き続き専念するとともに、恐らく 28 年度中には終わらないであろうギルピン、プライス、ナイト、アリソンに加え、英国の代表的な造園家であるハンフリー・レプトン（Humphry Repton, 1752-1818）らのピクチャレスク論の概念の整理についてもこれを継続して行った。また、その作業と並行して、多くの研究成果が確認されているウィリアム・ワーズワスとピクチャレスクに関する論文を精読することによって、本研究の最も重要なテーマであるキーツとピクチャレスクとの関係を考察する上での参考にした。

それと同時に、既にこれまで申請者が幾度となく熟読しているジョン・キーツの詩と彼の書簡を、今度はピクチャレスクという視点から再度精読し、得られた研究成果を基にピクチャレスクがキーツに与えた影響について考察した。上述の通り、両者についての研究の多くは彼の後期の代表作でもある『ハイペリオン』及び『ハイペリオンの没落』を取り扱ったものに集中している。従って、本研究では、それらの作品を含めてキーツの作品を網羅的に読み込み、イギリスの文化的な側面からキーツとピクチャレスクとの関係に迫った。

最後に、資料収集方法自体にも工夫を凝らし、3 年間という限られた研究期間に於いて、効率的かつ効果的な研究が行えるように心掛けた。日本国内で入手可能な資料については全て出来る限り国内で収集するべく、インターネットを大いに活用した。具体的には、現在主流となりつつある、e-book や e-journal など、PDF ファイルなどの形式によって、オンラインで提供されている資料については可能な限りそれらを活用し、必要があればイギリス在住の研究者に資料収集を依頼した。申請者は British Library が提供している *The British Newspaper Archive* と呼ばれ、過去の雑誌や新聞のアーカイブをネット上で読むことが出来る有料サービス、及び *Questia* と呼ばれる有料の論文検索サービスを利用しているが、いずれも私費を充当して資料収集に役立てている。原則としてはそれらのサービスを使用したが、それでも入手が不可能な資料が多くあると考えられるため、その場合に限ってのみ申請者がイギリスにて収集を行うこととして、経費を最大限節約しつつ、文献の精読など、最も重要な作業に時間を費やすことができるように務めた。

４．研究成果

平成 28 年度はピクチャレスクに関する資料収集と関連する概念の整理に注力した。ピクチャレスクの概念は多種多様であるため、まずはピクチャレスク論を考察する上の前提となるエドマンド・バークの著作『崇高と美の起原』から読み取れる「崇高と美」の概念、さらにはカントが『判断力批判』で論じた「崇高論」をまとめることにした。続いて、ウィリアム・ギルピン及びユーヴドール・プライスのピクチャレスク論について、彼らの主張をまとめた。それと同時に、特に関連する 19 世紀初頭イギリスの政治や文化に関する資料収集も行い、当時のイギリス文化や社会に対してピクチャレスクがどのような影響を与えたのかというテーマでの研究も行っている。

さらに、ジョン・キーツが 1818 年夏に親友のチャールズ・ブラウンを連れ立って赴いたスコットランド徒歩旅行に注目し、その旅程、詩や書簡を手掛かりに、ピクチャレスクの影響について考察した。その結果、キーツは崇高、美、もしくはピクチャレスクといった概念とはまた違った価値観をイギリスの風景に見い出すようになったのではないかと結論づけた。以上の研究成果に関しては、日本英文学会九州支部大会において口頭発表の形で発表した。

また、キーツの詩におけるピクチャレスクの影響については、共著『詩的言語のアスペクツ ロマン派を超えて』の中で「詩と詩論の相互作用とその変容―「秋に寄せて」におけるキーツの新たな試み」という題目でその成果を発表できたことも付け加えたい。

平成 29 年度は、前年度に引き続き 18 世紀から 19 世紀に出版されたピクチャレスクに関係する文献の収集に専念した。その作業と並行して、多くの研究成果が確認されているウィリアム・ワーズワスとピクチャレスクに関する論文を精読することで、本研究の最も重要なテーマであるキーツとピクチャレスクとの関係を考察する上での参考とした。同時にジョン・キーツの詩と彼の書簡を、今度はピクチャレスクという視点から再度精読し、得られた研究成果を基にピクチャレスクがキーツに与えた影響について考察した。

その結果、平成 29 年度の研究成果として、研究論文「キーツの自然観とピクチャレスク」を上梓することができた。本論文では、主としてキーツの詩における自然とピクチャレスクの影響を検証した。まず、18 世紀初頭から 19 世紀初頭における崇高、美、そしてピクチャレスクの概念をそれぞれ概観し、その後、ピクチャレスクの概念がどのようにキーツの自然観に影響していたのかを検証した。キーツは明らかにピクチャレスクの信者の一人であり、彼の友人とのスコットランドの徒歩旅行はある種のピクチャレスク・ツアーとして見なすことができる。実際、彼が多くのピクチャレスク的な場所を訪れていることがその証左である。最後に、キーツの幾つかの詩におけるピクチャレスクの影響について検証した。彼の 1818 年のスコットランドツアーの目的は、彼の詩の範疇をそれまで以上にさらに広げようとするものであった。結局のところ、キーツが熱心に信仰していたピクチャレスク的な概念は徐々に退けられ、代わりに

彼が慣れ親しんでいたイギリス南部の風景や土着の言葉の重要性を再認識することになったのではないかと結論づけた。

平成 30 年度は、平成 28 年度および平成 29 年度に引き続いてピクチャレスク論の概念の整理を引き続き行った。また、既にこれまで申請者が幾度となく熟読しているジョン・キーツの詩と彼の書簡を、今度はピクチャレスクという視点から再度精読し、得られた研究成果を基にピクチャレスクがキーツに与えた影響について考察する。両者についての研究の多くは彼の後期の代表作でもある『ハイペリオン』及び『ハイペリオンの没落』を取り扱ったものに集中している。従って、本研究では、それらの作品を含めてキーツの作品を網羅的に読み込み、イギリスの文化的な側面からキーツとピクチャレスクとの関係性について調査した。

平成 30 年度の研究成果としては、１本の論文を上梓することができた。そのタイトルは「イギリスにおける徒歩文化（１）：グランド・ツアーとピクチャレスク」であり、その概要は以下の通りである。17 世紀から 19 世紀のイギリスで人気を博したグランド・ツアーの流行とその衰退を概観し、その後に続いたピクチャレスク・ツアーと徒歩文化について調査した。本論の前半では、裕福な貴族の子弟達がヨーロッパ、とりわけフランスやイタリアに赴き、座学で学んだ知識を直に自らの眼で確認する目的であったが、実際には十代半ばで海外旅行をするのはあまりにも時期尚早である、または危険であるという批判もあったことを明らかにした。本論の後半では、グランド・ツアーの期間、参加者の年齢、そして参加者数等の記録を検証した。その結果、平均期間は徐々に短くなるとともに、平均年齢は徐々に高くなり、地主階級や中産階級の旅行者の増加に伴って参加人数は増えたことも明らかとなった。最後に、ピクチャレスクについて触れた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 江口　誠、「イギリスにおける徒歩文化（１）：グランド・ツアーとピクチャレスク」、『佐賀大学全学教育機構紀要』、査読無、第 7 号、2019、31-46

② 江口　誠、「キーツの自然観とピクチャレスク」、『佐賀大学全学教育機構紀要』、査読無、第 6 号、2018、17-28

〔学会発表〕（計 1 件）

① 江口　誠、「ロマン派とピクチャレスク―キーツの自然観に関する一考察」、日本英文学会九州支部第 69 回支部大会（中村学園大学）、2016

〔図書〕（計 1 件）

① 江口　誠　他、松柏社、『詩的言語のアスペクツ　ロマン派を超えて』、2016、29-47

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

なし

○取得状況（計 0 件）

なし

〔その他〕

ホームページ等

なし

６．研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。